

ます。私たち農家と消費者が直接ふれあえる場所として、新鮮な野菜を安く提供しながら、皆さんがどんな物を求めているのか知るうえで、改めて力を入れ、大切にしていきたいと考えています。

### お米はどうなっているの

次に、ミニマムアクセスで外米が輸入され、さらに、新食糧法によって米の販売が自由になり、産地も精米月日も書かれていない正体不明の「あきたこまち」が安く売られたりしていると聞きます。また、十キログラムが五桁の価格になる米もあると聞きます。それなりにおいしいとは思いますが、その産地で穫れた量の何倍もの米

が同一産地名で出回っていることも事実です。

国内で唯一自給できる米を、自由という名の下に目隠しされるようなことがあってはならないと思います。

ただ、秋田県の県北の「あきたこまち」は、自主流通米市場で二年連続最高ランクの特Aにあります。皆さん、自信をもって「あきたこまち」を食べてください。

### 周りを見てみたら

最近、教育現場で農業体験をさせる試みが行われたり、都会の私たちの農業志向が話題になったりします。これは、物質的な豊かさだけでなく精神的な豊かさを求め

るようになってきたからだと思えます。

また、漁師が海を守るために川の上流に木を植える運動をしていることなど、自然のサイクルを重視した考え方が求められるようになってきたことをよく耳にします。

### 牛から教えられたこと

私は、大地に種を蒔くことを子供を育てることと同じように感じています。

こんなことを考えていると、先日、日のJ A大館女性部大会で聞いた山崎洋子さんの講話を思い出します。大会の前日、私たちと山崎さんとできりたんぼ作りに挑戦してみました。山崎さんは「きりたんぼってこうして作るのか。まるで粘土細工みたいだ」と笑いながら話してくれました。

山崎さんは、街の暮らしを捨て、女であっても自分が納得できる、一生を賭けた仕事がしたいと、夫と一緒に開拓農家に飛び込んでいったかたです。「苦勞を重ねながらも、無から有を一つずつ作り上げていく生活の中で、牛を通じて、肉や餌となる穀物から政治や経済の動きが、排出された糞尿から地球の自然や環境のあり方が、そして、牛の受精卵から宇宙と生命を考えさせられた」と言います。さらに、「人間は、健康な体があつてこそ、健康な生命を生み出

し、それを維持してゆけるのだと言います。その健康の源こそ、食べ物を作り出す農家と自然環境であり、今一度、これらを見直していかなくてはいけない」と提言してくださいました。

### 種を蒔いてみませんか

私は、種を蒔いて花や実がなるのを見るのが好きです。

たとえば、あんな小さな種が、夏の朝、小さな白い花をつけ、やがて秋にはたくさんさんの稲穂になります。自然は大きなサイクルです。どこかを止めれば、どこかに無理がきます。

何の種でもいいんです。みんな蒔いてみましょう。それが食を守り、そして、本当の豊かさとは何かを考えるヒントになるところだと思います。



きりたんぼ作りに挑戦している山崎洋子さん(右)と小林リポーター(左)



昨年の稲刈り風景